

# 北のとびら

vol. 129

令和5年3月



学ぶともっと楽しい寄席演芸

落語・講談・浪曲、



特集 公益財団法人北海道文化財団・公益社団法人落語芸術協会協定事業

十勝北部特集

## 北芸亭・寄席演芸講座

アート巡礼 十勝北部／つくる人in新得町 前島拓也

ジモトデザイン 本別町・キレイマメ

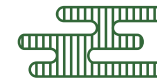
伝わる文化 鹿追町白蛇姫舞／ART FILE 紅露はるか



特集 | 公益財団法人北海道文化財団・公益社団法人落語芸術協会協定事業

# 北芸亭・寄席演芸講座

PHOTO / 佐々木良子 取材・文 / 市田愛子、菅谷環、悦永弘美



「北芸亭」は2021年より始まった春風亭昇太師匠がプロデュースする落語会。伝統芸能の発展を目的に、北海道文化財団と落語芸術協会が協定を結んだ全国的にもあまり例がない取り組みです。2022年は人気の落語家、講談師、浪曲師らを講師に迎え、実演を交えながら解説するワークショップ「寄席演芸講座」を開催。子どもから大人まで、幅広い年齢層で賑わった講座の様子をレポートします。



01 A太郎さんの講座は終始笑いが絶えず、大盛り上がりでした。  
02 キセルや釣竿、箸など扇子は様々な見立てに活用されます。  
03 なんと着物の着付けまで教えてくれたA太郎さん。  
04 当日参加者に配られた張り扇は京子さん自らの手作りでした。

## 第2回 神田京子のワクワク講談塾 2022年8月27日



▲「目を見開き、大きな声を出して最初の一言を発すると印象が変わりますよ」と京子さん。講談塾のアドバイスは日常生活の会話術にも役立ちます。



▲普段は舞台役者だという参加者は、発声が完璧なので、少し踏み込んで音の緩急と高低で表現する古典口調の響き方をレクチャー。

ンバン！と張り扇を叩く良い音が響いたのは神田京子先生の「ワクワク講談塾」。この日、テキストとして配られたのは「いざ鎌倉」のもとなった「佐野源左衛門駆けつけ」です。源左衛門が鎌倉に駆けつける時のいでたちを語った一節で、テキストには張り扇を叩くタイミングや音の強弱が記されていて、まずは全員で読み上げ練習。その後、一人

ずつ高座に上がり、いざ実践。参加者の中には音楽や演劇に携わっている方もいて、京子さんはそれぞれの個性に合わせて表現を足し引きしつつ丁寧に指導してくれました。「講談師は優れた文章を屈けることに徹するのが大切。聞き手が自ら感情を注いでくれるのが、講談の面白いところですよ」と語り、深い領ぎと拍手の中で1時間半に及んだ熱のこもった講座を締めくくりました。

### 神田京子(かんだ・きょうこ)

1999年、二代目神山山陽に入門、2014年に真打昇進。2020年より山口・東京の2拠点で活動を始める。山口県出身の童謡詩人・金子みすゞの人生や作品を講談に仕立て、令和三年度(第76回)文化庁芸術祭賞優秀賞受賞



ワークショップは講談の楽しみ方を皆さんの心と身体に落とし込むことができる貴重な機会。そして、私たち講師にとっても、講談を広めるための大切な種蒔きであり、新たなお客

さまとの出会いの場です。今回のワークショップ参加者一人ひとりがきっかけになって、北海道内で100人、1000人と講談に興味関心を持つ方が増えることを期待しています。

## 第1回 昔昔亭A太郎の熱血!落語入門講座 2022年6月18日



▲講座には断家を夢見る中学生も参加し、高座で落語を披露する場面も。緊張しながらも師匠直々にアドバイスをもらい、感激の様子。



▲扇子を箸に見立てて、蕎麦をすすする仕草を直接指導。「こんな機会はめったにない。いい思い出になりました」と参加者も大満足。

寄席で落語を聞く機会はあれど、師匠から直接、落語のいろはを学べる機会はそう多くはありません。開講前から期待に胸を膨らませていた参加者の前に出陣子とともに登場し、大きな拍手で迎えられた昔昔亭A太郎師匠。寄席演芸講座のトップを飾る「落語入門講座」ということで、まずは落語家になるまでのプロセスを紹介していただきました。27歳の時に

弟子入りした桃太郎師匠とのエピソードなど、自身の修業時代の経験を交えながら、苦勞も笑い話に。さらに扇子や手ぬぐいなど小道具の解説や落語表現の基本を直接指導したりと内容は盛りだくさん。参加者も夢中になって講座を楽しみました。最後は落語「野ざらし」を披露。終始、笑いの絶えない熱血指導で会場を大いに盛り上げてくれました。

### 昔昔亭A太郎(せきせきてい・えーたらう)

1978年、岐阜県出身。(公社)落語芸術協会に所属する落語家。テレビの制作会社で放送作家を志していたが、落語に出会い、2006年、昔昔亭桃太郎に弟子入り。2010年に二ツ目昇進、2020年5月より真打ちに昇進。



落語をよく知らないのに、楽しめるだろうか、古典落語は難しそう、寄席は敷居が高い……など落語に対して、そんな心配やイメージを持つ方もいらっしゃると思いますが、僕が伝えたいの

は「落語って楽しいよ」「気構えなくてもいいよ」ということだけです。ワークショップは、近い距離感で僕の熱量をお客さんに受け取ってもらえる良い機会。僕自身も楽しむことができました!



09 壇上で「唸り」を体験した参加者から「気持ちいい!」の感想が。10 冒頭から参加者と掛け合いながら、会場を温めた鯉丸さん。11 プロの落語に聞き入る参加者の皆さん。12 前日の深川市の小学校で行った鯉丸さんのワークショップにも参加したという小学生。講座終了後も熱心に話を聞いていました。

05 軽妙な語り口で参加者の心を一気に引き込みました。  
06 「正面を見据えることで声に自信が生まれますよ」と京子さん。  
07 時折、浪曲の節を交えながら進んだ入門講座は迫力満点でした。  
08 打ち合わせなしでも、息がぴったりの太福さんとみね子師匠。

### 第4回 瀧川鯉丸のはじめてのらくご 2022年12月3日(土)



▲本講座最年少参加者で、落語の絵本が大好きだという6歳の女の子。美しいお辞儀の作法を学びながら元気に自己紹介を行いました。



▲「落語は大衆演芸です。気構えも緊張も必要ないんですよ」と話し、高座に上がる参加者たちの緊張感をほぐしてくれました。

**全** 4回の講座も、ついにこの日が最終回。ラストを飾るのは瀧川鯉丸さんです。「皆さんには最初からプレーヤーとして参加してもらいます」と切り出し、早速参加者を高座に上げる鯉丸さん。お辞儀や次の演者のために座布団をひっくり返す「高座返し」を学びながら、参加者は自分の趣味や特技、好きなものを交えた自己紹介に挑戦。「落語」というのは日常会話の延長なんですよ」と

鯉丸さんが話す通り、合いの手を入れながら話を膨らませると、単純な自己紹介にも起承転結が生まれます。最初は恥ずかしがっていた参加者も、やがて自信がつく実践的な講座となりました。後半は、鯉丸さんによる古典落語の演目「武助馬(ぶすけうま)」に加え、会場のリクエストに答える形で特別に「寿限無(じゅげむ)」も披露。参加者は聞き手に戻って落語を存分に堪能しました。

**瀧川鯉丸** (たきがわ・こいまる)  
1987年、神奈川県生まれ。2011年、瀧川鯉昇に入門し、前座名「鯉〇」で4年間の前座修業。2015年、二ツ目に昇進「鯉丸」となる。2019年、第11回「前橋若手落語家選手権」準優勝。都内寄席のほか、延べ200以上の学校公演に出演している。



**北** 海道を訪れるたびに実感するのは、お客さまの歓迎ムードや明るさです。昨日は深川市の小学校で落語講座を行いました。皆さんとも楽しんでくれて、私自身も非常に充実した時間

でした。ワークショップは落語に興味を持った人同士が接点を持つ場です。年齢もキャリアも異なる皆さんが一堂に会する場所に参加できることを非常にうれしく思います。

### 第3回 玉川太福・曲師玉川みね子の浪曲入門講座 2022年10月10日(祝)・祝



▲質疑応答の時間には、太福さんがこれまでに披露してきた演目への質問や、みね子師匠の三味線についての質問などが活発に飛び出しました。



▲「どなたか唸ってみませんか?」の呼びかけに、初めは恥ずかしがっていた参加者も、太福さんのサポートで「唸り」に挑戦。貴重な機会を得ました。

**「旅** (ゆけくぼ) これは古典芸能に詳しくない人でも、誰もが一度は耳にしたことのある浪曲「清水次郎長伝」の冒頭です。玉川太福さんと曲師・玉川みね子さんによる浪曲入門講座は、名作の一節から始まりました。講談、落語に次いで、明治初期に浪花節として誕生し、大正・昭和に発展した浪曲の歴史から、浪曲の楽しみ方、関東節と関西節

の違いなど基礎知識に加え、節の回し方までを紹介。太福さんの修業時代を語った浪曲に、会場からは大きな笑いとお手拍子が起きました。後半は太福さんの声に合わせて参加者が心の中で「唸り」に挑戦。2名が登壇して、習いたての浪曲を披露しました。最後は玉川一門のお家芸で、浪曲の中でも人気の演目である「国定忠治」で会場を一つにしました。

**玉川太福** (たまがわ・たいふく)  
1979年、新潟県生まれ。演劇や演芸の世界に憧れ、作家の道を志していたとき、寄席で浪曲に出会い、衝撃を受ける。2007年、27歳で二代目・玉川福太郎師匠に入門。文化庁芸術祭大衆芸能部門新人賞や浅草芸能大賞新人賞を受賞。



**浪** 曲は頭で考えるよりも、身を委ねて感じてもらうのが大事。その上で、もう少し興味を深掘りしたい方に向けて基本的な情報を紹介し、浪曲をより楽しんでもらえるような材料にしてい

けたら。何より、ワークショップは浪曲の迫力を身近で感じていただける絶好の場所。札幌の皆さんに私が初めて浪曲に出合ったときのような、原始的な衝撃を体験してもらえたらうれしいですね。

# 十勝北部で 探すアート

※新型コロナウイルス感染症の状況によって掲載されている営業時間やイベント開催日時等が変更になる場合があります。

刺激がいっぱい  
十勝北部のアートスポット



## 07 町民が生き生きと生涯活躍できるコミュニティ施設 hareta (ハレタ) かみしほろ



町民の趣味や特技を活かしたチャレンジイベントを多数実施しているコミュニティ施設。4月9日には、ともに移住者である写真愛好家・伴公夫とピアノ愛好家・渥美俊介によるアートイベントを開催予定。

- 住所 / 上士幌町字上士幌東3線235-6 ●TEL.01564-7-7630
- アクセス / JR帯広駅から車で約1時間10分
- 開館時間 / 8:30~17:15 ●休館日 / 土・日・祝日、年末年始
- 入館料 / 無料 ●駐車場 / あり ●https://kamishihoro-town.com

## 06 朝ドラに登場した青年画家のモデルとしても話題 神田日勝記念美術館



農業に従事しながら絵を描き続けた夭折の画家・神田日勝の美術館。油彩画やデッサン、関連資料を収蔵・展示しています。コレクション展「日勝が駆け抜けた時代」も開催中(4/9まで)。

- 住所 / 鹿追町東町3丁目2 ●TEL.0156-66-1555
- アクセス / 拓殖バス「神田日勝記念美術館前」より徒歩すぐ
- 開館時間 / 10:00~17:00(最終入場16:30)
- 休館日 / 月曜日(祝日の場合は開館)、祝日の翌日(土日の場合は開館)、年末年始(12/28~1/3)
- 入館料 / 一般 530円、高校生 320円、小中学生 210円
- 駐車場 / あり ●https://kandanissho.com

## 05 日高山脈の麓に広がる自然と人が一体となる庭 十勝千年の森



日高山脈に抱かれ、森と大地がダイナミックなスケールで展開する北海道ガーデン。園内には彫刻家の板東優ほか現代アート作品が随所に置かれています。

- 住所 / 清水町羽帯南10線 ●TEL.0156-63-3000 ●アクセス / JR帯広駅から車で約45分
- 開園時間 / [4/22~6/30]9:30~17:00(最終入場16:30)、[7/1~8/31]9:00~17:00(最終入場16:30)、[9/1~10/15]9:30~16:00(最終入場15:30)
- 休業日 / 期間中無休 ●入場料 / 一般・大人(高校生以上)1,200円、小中学生600円、小児(小学生未満)無料
- 駐車場 / 180台 ●http://www.tmf.jp



## 04 十勝川温泉にある陶芸ギャラリー 空昌窯



古い馬小屋を改築した陶芸ギャラリー。浦幌町・十勝太から採取した自家製粘土を基本に作陶した表情豊かな食器やオブジェなどが1000点以上並び、販売もしています。

- 住所 / 音更町十勝川温泉南4丁目1-10 ●TEL.0155-46-2818
- アクセス / 十勝バス「十勝川温泉12号」バス停から徒歩1分
- 開館時間 / 9:00~16:00 ●休館日 / 不定休
- 入場料 / 無料 ●駐車場 / あり

## 01 畑や牛舎を眺めて過ごす建築家が設計したカフェ Café de Camino



建築家が設計し、伝統工法の木組みで建てたカフェ。十勝産のカラマツやラワンブキの和紙など、内外装に地域材を使用しています。5月から9月は食と雑貨のマルシェを開催中。

- 住所 / 足寄町蝶湾93-25
- 営業時間 / 10:00~16:00(冬季)、10:00~17:00(夏季)
- 休館日 / 不定休 ●駐車場 / 10台
- https://www.instagram.com/cafe\_de\_camino/

## 02 子どもから大人まで気軽に楽しめるアート企画が満載 アトリエ ムーン・f



池田町の風景を透明水彩で表現する画家・杉山雄作によるアトリエ兼教室です。透明水彩教室のほか、会員制の子どもアート教室も開催しています。

- 住所 / 池田町清見132
- TEL.015-572-2198 ※留守番電話にメッセージを残してください
- アクセス / 池田駅から車で5分
- 開催時間・休館日 / 教室によって変動
- 体験料 / 1回1,500円~※会員制

## 03 全国にファンを持つ手作り家具とカフェの店 家具工房&カフェ ブーオ



オーダー家具の製作を中心に陶芸品、スタンドグラスなどを製作販売。店内には家具や時計、マグカップ、スタンドグラスのランプ、お皿などオリジナル作品を展示中。

- 住所 / 士幌町字上音更西7線166-9 ●TEL.01564-5-5733
- アクセス / 道東道音更ICから20分
- 開館時間 / 11:00~16:00 ●休館日 / 月曜~金曜
- 駐車場 / 10台 ●https://1994buho.wixsite.com/buho

日常に溶け込むデザインの魅力に迫る！



▶2007年3月、特許庁に「クレイマメ」の商標登録を申請  
ヘルシー志向の女性をメインターゲットにしたこだわりの商品づくりと、高級感を意識したラベルデザインでブランディングに成功



「クレイマメ」シリーズ  
本別産の黒豆商品をブランド化

2000年に開町100年の節目を迎えた本別町は、「豆のまち・ほんべつ」をキャッチフレーズに、町の活性化事業に着手しました。しかし、町内で加工・製造した商品を各地の催事に出品し、販売促進に乗り出したものの、消費者には「北海道の豆」、「十勝の豆」としか認識されません。そこで企画したのが、本別産の豆のブランド化です。

2006年度には、国交省北海道開発局帯広開発建設部の補助を受け「地域ブランド形成促進事業」を開始。地元企業・団体5社と町が連携してブ

プロジェクトチームを結成し、2007年には、十勝本別「クレイマメの会」を発足しました。「日本一の豆をつくる本別町の名を高めたい」「良質で美味しい<十勝本別の豆>を消費者に届けたい」と想いをひとつに商品開発や販路開拓など、ブランドづくりに邁進。ブランディングやネーミング、パッケージデザインなどは、武蔵野美術大学基礎デザイン学科の主任教授(当時)で、地域産業におけるブランド開発や商品開発を数多く手掛ける宮島慎吾さんと学生たちに依頼しました。

本別町に直接足を運んだ宮島さんたちは、本別町産の「中生光黒大豆」に的を絞り、女性をターゲットにしたシリーズを提案。こうして誕生したのが、「ツヤツヤで粒の大きな黒大豆を食べて、体の中からキレイになってほしい」と願いを込めたブランド「クレイマメ」です。パッケージデザインは中生光黒大豆に由来する黒を基調に、金色の縁取りで高級感を演出。豆のフォルムを背景に忍ばせたカナ文字のフォントが目を惹く印象的な構図となりました。極端な装飾は避け、無駄を削ぎ落としたシンプルなデザ

インと洗練された雰囲気は、まるで菓子かサプリメントのよう。高い品質を誇る美味しさと、体に良い効果をもたらすことが連想されるデザインになっています。容器に合わせて円形や長方形のレイアウトを使い分けながらも、統一感のあるデザインには、「クレイマメ」がまちの特産品として認知されるように、という想いが込められています。現在は、本別産小豆を使用した「クレイマメ」赤シリーズの展開に向けて検討中とのこと。町、生産者、メーカーによる挑戦は続いています。



前島商店・代表 前島拓也

東

大雪の美しい山々と日高山

前島さんは、中学校の美術の授業で

脈に抱かれた新得町。自然が広がるこの土地に工房を構えているのは、木工作家の前島拓也さんです。

2016年に旭川から奥さんの実家がある新得町に移住、築75年の牛舎を自らの手で工房に改築しました。家具づくりに出た端材を玩具に、さらにその端材をカトラリー、そして最後に残ったものは薪ストーブの燃料に。わずかな木端も無駄にせず、使い切ることを大切にしながら、家具や木工品を手掛けています。

「厳しい冬を迎える北海道は、家の中で過ごす時間もおのずと長くなります。机や椅子、フックやスプーンなど、暮らしにかかわる道具の使い心地や美しさへの思いは、移住してからより一層強くなった気がします」

熊本県で生まれ育った

前島さんは、中学初めて木工を体験。ノミを使って木を掘る作業が性に合い、高校時代は2年間かけて丸太を使ったベンチを製作しました。大学で木材造形とプロダクトデザインを学び、より深く家具を学ぼうと考えて卒業後は旭川へ。東海大学芸術工学部に研究生として在籍した後、旭川市科学館「サイパル」で木工担当として働き始めました。



前島拓也 (まえじまたくや) 熊本県生まれ。旭川市科学館勤務中の2014年に「前島商店」を立ち上げて、2016年に新得町に移住し、独立。家具からカトラリーなど大小問わずさまざまな作品を手がけている。●販売サイト 0001.handcrafted.jp

「科学館では、木工教室用の課題をデザインしていました。自分以外の人が作ることを考えて構造を考えるので、オリジナル作品とは違う面白さがありました」。2014年からは「前島商店」の屋号で、作家活動も開始。新得町に工房を構えるまでの2年間、発想力を磨きながら、作品づくりに向き合っていました。

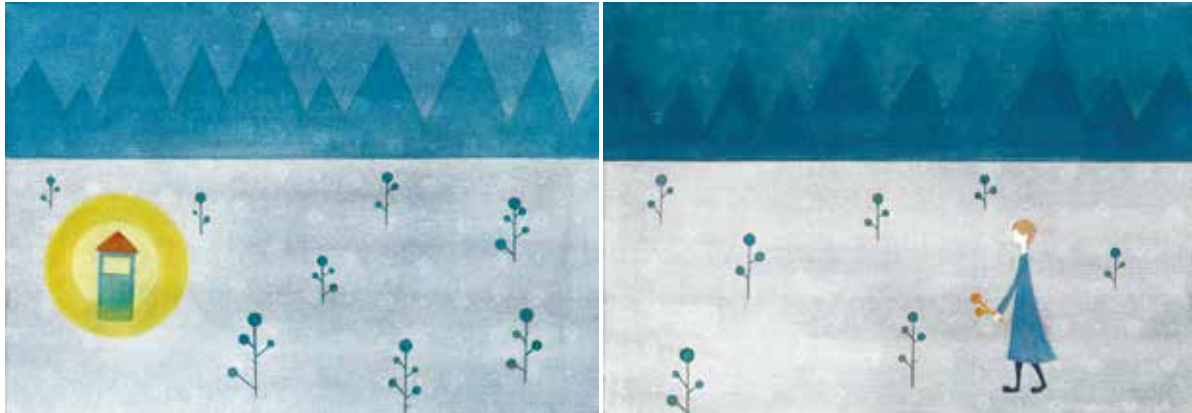
「最近は新得町産の木材を積極的に使うようになりまし」と前島さん。新得町に移住して7年目を迎え「今年自分分の作品づくりに力を入れたいです」と日々の暮らしや豊かな自然に着想を得ながら、ものづくりの意欲を育てています。



小さな動物を組み合わせるとライオンやキリンになるユニークな動物パズル。玩具としてもインテリアとしても大人気です。

DATA 本別町役場 企画振興課 商工観光・元気まち担当 本別町北2丁目4-1 TEL0156-22-2141(代表) <https://www.town.honbetsu.hokkaido.jp/kireimame>

- (有)山口醸造食品「黒豆納豆」TEL 0156-22-2342
- (有)山口醸造食品「黒豆味噌」「なんばん味噌」ほか TEL 0156-22-2077
- (合)豆屋とかち岡女堂本家「素焼黒豆(ノーマル・しお・こがし味噌)」ほか TEL 0156-22-5981
- まめっこ倶楽部「黒豆(生豆)」TEL 090-7654-8378
- 本別発豆ではりきる母さんの会「黒豆とうふ」ほか TEL 0156-24-2416
- レストラン秀華「黒まん」TEL 0156-22-7707
- 北海道立農業大学校「黒豆きなこアイスクリーム」TEL 0156-24-2121
- 本別町観光協会「黒豆きな粉」TEL 0156-22-3306



## 言葉にならない思いを風景に重ねて描く

**生** まれ育った北海道の自然豊かな風景や雪景色を眺めていると、言葉では表現できないような気持ちになる時があります。私はそうした言葉にならない気持ちを風景に重ねて描いています。

日本画は私にとって、自分の心情を表すためにもっとも適したツール。大学時代に日本画研究室で学んで以来、作品を通して人とつながることが嬉しく、生

涯に渡り絵を描いていこうと決めました。

今回の個展「夜のおわりに」では、冬の景色、移り変わる時間の夜の風景、明けていく風景を中心とした作品を展示しています。会期中は、冬から春に移行する季節で、夜明け前と似ていることや、世の中や個人レベルで起こる様々な出来事が「静かに夜が明けて光が差していくように」という想いを込めて、このタイ

トルを付けました。

上の二つの作品は、夜の森で赤い花を持った人物が小さな灯りを目指して歩いている連作になります。具体的な物語はなく、思い浮かんだ場面を絵にするため、後から過去の作品の場面とつながることがあります。この作品もそうした流れの一つです。

下の作品は「アケノヨル」と題した絵で、冬に家の近くで鳥が木々にとまっている姿を見た

時に、絵にしたいと思い生まれました。

他にも今回の個展では、生まれ育った北海道の冬の暗闇と寒さは、場所と時間は違っても、どこかでつながっているという記憶と心象を重ねた6枚の連作や、雪の降る風景の臨場感を描きたくて、初めて使う画材で実験した作品など、季節や時の移り変わりを感じる作品も多数展示しています。暗い時から明るい時へ。ぜひ、会場でその空気を感じてください。

## 紅 露 は る か

札幌市在住の日本画家。北海道教育大学札幌校日本画研究室卒業。日常、生活する中で出会った景色と季節によって表情を変える自然にインスピレーションを受け、その時々自分の心情を共鳴させて作品を制作。

●公式WEBサイト

<https://koroharuka.com/>

VR展示は  
QRコードからも!



詳しいSTORYはWEBで



「白蛇姫舞」は1972年に町商工会青年部を中心に創作された舞。然別湖に伝わる伝説を基に創作された「白蛇姫物語」から着想を得ています。

北海道文化財団アトスペース企画展 vol.51

紅露はるか展「夜のおわりに」

2023.2.13～4.27 9:00～17:00 ※土日祝休館 ※都合により臨時休館する場合があります。

場所／札幌市中央区大通西5丁目11大五ビル3F 問い合わせ／011-272-0501

VR展示公開中!

<https://my.matterport.com/show/?m=iz8Z27VTYuT>

入場  
無料

新進アーティスト育成事業

●希望の大地の戯曲賞「北海道戯曲賞」

全国に門戸を開き、次代を担う劇作家や優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合うことにより、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的に創設された「北海道戯曲賞」。今年度は全国から142本の応募があり、2023年2月15日に行った最終選考会で審査員が議論を重ねた結果、大賞は「チェーホフも鳥の名前」(ごまのはえ/大阪府)が選ばれました。

●大賞(賞金50万円/記念楯)

大賞作品:「チェーホフも鳥の名前」

作:ごまのはえさん(大阪府)

1977年生まれ。大阪府出身。劇団ニットキャップシアター代表。劇作家、演出家。京都を創作の拠点に大阪、東京、福岡、名古屋などの各都市で公演を続けている。「愛のテール」でOMS戯曲賞大賞。「ヒラカタ・ノート」でOMS戯曲賞特別賞及び新・kyoto演劇大賞。一般社団法人毛帽子事務所役員。一般財団法人地域創造派遣アーティスト。



●優秀賞(賞金5万円/記念楯) 該当作品なし

【最終審査員(五十音順)】

- 江本 純子(毛皮族・財団、江本純子)
- 桑原 裕子(KAKUTA)
- 瀬戸山 美咲(ミナモザ)
- 古川 健(劇団チョコレートケーキ)
- 松井 周(サンブル)

※受賞作品及び審査員の選評は、北海道文化財団ホームページ・北海道戯曲賞(<https://haf.jp/gikyoku.html>)で公開しています。

人づくり一本木基金(長原賞・スチュレ・エング人づくり基金)事業

●ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な個人及び団体等に「長原賞/地域貢献賞/奨励賞」を贈呈しています。令和4年度は、鳥井裕也さんが「奨励賞」を受賞しました。

◎奨励賞(賞金10万円/記念楯)

鳥井 裕也さん(帯広市/建具工/(有)高橋加工部勤務)

北海道立帯広高等技術専門学院造形デザイン科修了後、現勤務先に入社。在学時に技能五輪全国大会で「建具」に出場し、銅賞受賞。翌第59回大会では金賞を受賞。さらに令和4年の第60回大会には「家具」に出場し敢闘賞を受賞。

アート選奨K基金事業

●アート選奨

北海道文化財団では、磯田憲一氏からの指定寄附をもとに、アート選奨K基金を創設。本道の文化の振興発展において「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人・団体に、アート選奨K基金賞を贈呈しています。令和4年度の実賞者は、方波見康雄さんと斎藤歩さんに決定しました。(賞金10万円/記念楯)

かたばみ

方波見 康雄さん(医師)

1926年奈井江町生まれ。1945年、旧制岩見沢中(現岩見沢東高)を卒業。北海道帝国大予科医類に入学。1952年、北大医学部を卒業。大学でがん免疫抗体の研究に、さらに内科の臨床に従事する。1959年に北大から奈井江町に戻り、父莊衛さん(1979年死去)が開業した方波見医院を継ぐ。以来、60年以上にわたり、地域の人々の“生老病死”に、同じ地域に暮らす一人の人間として寄り添い続ける。1994年、地域で老いを共にみる仕組みを作ろうと、町立国保病院に入院した患者を、かかりつけ医が診療できる「開放型共同利用」を町長に提案し、地域包括ケアシステムを、いち早く実現。また、緩和ケア、ターミナルケア(終末期医療)、死の臨床など、専門的な用語や概念が国内で普及する前に診療所で実践した。専門は、内科学、老年医学、生命倫理。

2006年より北海道新聞生活面にエッセー「いのちのメッセージ」を書き始める。

2011年、北海道大学大学院医学研究科特別賞受賞。

2017年、第71回北海道新聞文化賞受賞。

2021年、後藤新平賞受賞。

◎主な著書

いのちのメッセージ「まちのお医者さん」が見つめる生老病死(北海道新聞社 2010年)

生老病死を支えるー地域ケアの新しい試みー(岩波書店2006年)

斎藤 歩さん(公益財団法人北海道演劇財団理事長、札幌座チーフディレクター)

1964年釧路市生まれ。北大演劇研究会を経て、1987年に札幌ロマンチカシアター鮎鯉(ほうぼう)舎設立。1996年、北海道演劇財団設立に伴いTPS契約アーティストに就任。2000年より(株)ノックアウト所属俳優として、東京での俳優・演出家の仕事を開始する一方、札幌でも2001年からTPSチーフディレクターとして「亀、もしくは…。」「冬のバイエル」「西線11条の Aria」「春のノクターン」「瀕死の王さま」など多数の演劇作品を発表。2016年4月より、札幌に移住し、北海道演劇財団の常務理事・芸術監督に就任。2020年4月より、同理事長に就任。札幌を拠点にした演劇創造、東京を拠点にした映画、テレビ、舞台出演など活動は多岐にわたる。

北海道戯曲賞選考委員(2014年度～2021年度)

北海道文化審議会委員(2016年度～)

札幌演劇シーズンプログラムディレクター(2019年～)

演劇創造都市札幌プロジェクト副代表(2015年～)

INFO

WEBマガジン「北のとびら」。冊子にはない情報も!ぜひご覧ください。

WEBマガジンはこちらから! <https://haf.jp/kitanotobira/>

